二人小町

芥川龍之介

一

小野（おの）の小町（こまち）、几帳（きちょう）の陰に草紙（そうし）を読んでいる。そこへ突然黄泉（よみ）の使（つかい）が現れる。黄泉の使は色の黒い若者。しかも耳は兎（うさぎ）の耳である。

小町　（驚きながら）誰です、あなたは？

使　黄泉の使です。

小町　黄泉の使！　ではもうわたしは死ぬのですか？　もうこの世にはいられないのですか？　まあ、少し待って下さい。わたしはまだ二十一です。まだ美しい盛りなのです。どうか命は助けて下さい。

使　いけません。わたしは一天万乗（いってんばんじょう）の君でも容赦（ようしゃ）しない使なのです。

小町　あなたは情（なさけ）を知らないのですか？　わたしが今死んで御覧なさい。深草（ふかくさ）の少将（しょうしょう）はどうするでしょう？　わたしは少将と約束しました。天に在っては比翼（ひよく）の鳥、地に在っては連理（れんり）の枝、――ああ、あの約束を思うだけでも、わたしの胸は張り裂（さ）けるようです。少将はわたしの死んだことを聞けば、きっと歎（なげ）き死（じに）に死んでしまうでしょう。

使　（つまらなそうに）歎き死が出来れば仕合せです。とにかく一度は恋されたのですから、……しかし

そんなことはどうでもよろしい。さあ地獄へお伴（とも）しましょう。

小町　いけません。いけません。あなたはまだ知らないのですか？　わたしはただの体ではありません。もう少将の胤（たね）を宿しているのです。わたしが今死ぬとすれば、子供も、――可愛いわたしの子供も一しょに死ななければなりません。（泣きながら）あなたはそれでも好（よ）いと云うのですか？　闇（やみ）から闇へ子供をやっても、かまわないと云うのですか？

使　（ひるみながら）それはお子さんにはお気の毒です。しかし閻魔王（えんまおう）の命令ですから、どうか一しょに

来て下さい。何、地獄も考えるほど、悪いところではありません。昔から名高い美人や才子はたいてい地獄へ行っています。

小町　あなたは鬼（おに）です。羅刹（らせつ）です。わたしが死ねば少将も死にます。少将の胤（たね）の子供も死にます。三人ともみんな死んでしまいます。いいえ、そればかりではありません。年とったわたしの父や母もきっと一しょに死んでしまいます。（一層泣き声を立てながら）わたしは黄泉（よみ）の使でも、もう少し優しいと思っていました。

使　（迷惑（めいわく）そうに）わたしはお助け申したいのですが、……

小町　（生き返ったように顔を上げながら）ではどうか助けて下さい。五年でも十年でもかまいません。どうかわたしの寿命（じゅみょう）を延ばして下さい。たった五年、たった十年、――子供さえ成人すれば好（よ）いのです。それでもいけないと云うのですか？

使　さあ、年限はかまわないのですが、――しかしあなたをつれて行かなければ代りが一人入るのです。あなたと同じ年頃の、……

小町　（興奮（こうふん）しながら）では誰でもつれて行って下さい。わたしの召使（めしつか）いの女の中にも、同じ年の女は二三人います。阿漕（あこぎ）でも小松（こまつ）でもかまいません。あなた

の気に入ったのをつれて行って下さい。

使　いや、名前もあなたのように小町と云わなければいけないのです。

小町　小町！　誰か小町と云う人はいなかったかしら。ああ、います。います。（発作的(ほっさてき)に笑い出しながら）玉造(たまつくり)の小町(こまち)と云う人がいます。あの人を代りにつれて行って下さい。

使　年もあなたと同じくらいですか？

小町　ええ、ちょうど同じくらいです。ただ綺麗(きれい)ではありませんが、――器量(きりょう)などはどうでもかまわないのでしょう？

使　（愛想よく）悪い方が好いのです。同情しずにすみますから。

小町　（生き生きと）ではあの人に行って貰って下さい。あの人はこの世にいるよりも、地獄に住みたいと云っています。誰も逢う人がいないものですから。

使　よろしい。その人をつれて行きましょう。ではお子さんを大事にして下さい。（得々と）黄泉の使も情だけは心得ているつもりなのです。

使、突然また消え失せる。

小町　ああ、やっと助かった！　これも日頃信心する神や仏のお計らいであろう。（手を合せる）八百万

の神々、十方の諸菩薩、どうかこの嘘の剝げませぬように。

二

黄泉の使、玉造の小町を背負いながら、闇穴道を歩いて来る。

小町　（金切声を出しながら）どこへ行くのです？　どこへ行くのです？

使　地獄へ行くのです。

小町　地獄へ！　そんなはずはありません。現に

昨日安倍の晴明も寿命は八十六と云っていました。

使　それは陰陽師の嘘でしょう。

小町　いいえ、嘘ではありません。安倍の晴明の云うことは何でもちゃんと当るのです。あなたこそ嘘をついているのでしょう。そら、返事に困っているではありませんか？

使　（独白）どうもおれは正直すぎるようだ。

小町　まだ強情を張るつもりなのですか？　さあ、正直に白状しておしまいなさい。

使　実はあなたにはお気の毒ですが、……

小町　そんなことだろうと思っていました。「お気

の毒ですが、」どうしたのです？

使　あなたは小野（おの）の小町（こまち）の代りに地獄へ堕（お）ちることになったのです。

小町　小野の小町の代りに！　それはまた一体どうしたんです？

使　あの人は今身持（みも）ちだそうです。深草（ふかくさ）の少将（しょうしょう）の胤（たね）とかを、……

小町　（憤然（ふんぜん）と）それをほんとうだと思ったのですか？　嘘ですよ。あなた！　少将は今でもあの人のところへ百夜通（ももよがよ）いをしているくらいですもの。少将の胤を宿すのはおろか、逢（あ）ったことさえ一度もありはしま

せん。嘘も、嘘も、真赤な嘘ですよ！

使　真赤な嘘？　そんなことはまさかないでしょう。

小町　では誰にでも聞いて御覧なさい。深草の少将の百夜通いと云えば、下司（げす）の子供でも知っているはずです。それをあなたは嘘とも思わずに、……あの人の代りにわたしの命を、……ひどい。ひどい。ひどい。

（泣き始める）

使　泣いてはいけません。泣くことは何もないのですよ。（背中から玉造の小町を下（おろ）す）あなたは始終この世よりも、地獄に住みたがっていたでしょう。して見ればわたしの欺（だま）されたのは、反（かえ）って仕合せではあり

ませんか？

小町　（噛みつきそうに）誰がそんなことを云ったのです？

使　（怯ず怯ず）やっぱりさっき小野の小町が、……

……

小町　まあ、何と云う図々しい人だ！　嘘つき！　九尾の狐！　男たらし！　騙り！　尼天狗！　おひきずり！　もうもうもう、今度顔を合せたが最後、きっと喉笛に噛みついてやるから。口惜しい。口惜しい。口惜しい。（黄泉の使をこづきまわす）

使　まあ、待って下さい。わたしは何も知らなかっ

たのですから、――まあ、この手をゆるめて下さい。

小町　一体あなたが莫迦(ばか)ではありませんか？　そんな嘘を真(ま)に受けるとは、……

使　しかし誰でも真に受けますよ。……あなたは何か小野の小町に恨(うら)まれることでもあるのですか？

小町　（妙に微笑する）あるような、ないような、……まあ、あるのかも知れません。

使　するとその恨まれることと云うのは？

小町　（軽蔑するように）お互(たがい)に女ではありませんか？

使　なるほど、美しい同士でしたっけ。

小町　あら、お世辞（せじ）などはおよしなさい。

使　お世辞ではありませんよ。ほんとうに美しいと思っているのです。いや、口には云われないくらい美しいと思っているのです。

小町　まあ、あんな嬉しがらせばっかり！　あなたこそ黄泉には似合わない、美しいかたではありませんか？

使　こんな色の黒い男がですか？

小町　黒い方（ほう）が立派（りっぱ）ですよ。男らしい気がしますもの。

使　しかしこの耳は気味が悪いでしょう。

小町　あら、可愛いではありませんか？　ちょいとわたしに触（さわ）らして下さい。わたしは兎（うさぎ）が大好きなのですから。（使の兎の耳を玩弄（おもちゃ）にする）もっとこっちへいらっしゃい。何だかわたしはあなたのためなら、死んでも好（い）いような気がしますよ。

使　（小町を抱（だ）きながら）ほんとうですか？

小町　（半ば眼を閉じたまま）ほんとうならば？

使　こうするのです。（接吻（せっぷん）しようとする）

小町　（突きのける）いけません。

使　では、……では嘘なのですか？

小町　いいえ、嘘ではありません。ただあなたが本

気かどうか、それさえわかれば好(よ)いのです。

使　では何でも云いつけて下さい。あなたの欲しいものは何ですか？　火鼠(ひねずみ)の裘(かわごろも)ですか、蓬莱(ほうらい)の玉の枝ですか、それとも燕(つばめ)の子安貝(こやすがい)ですか？

小町　まあ、お待ちなさい。わたしのお願はこれだけです。――どうかわたしを生かして下さい。その代りに小野の小町を、――あの憎(にく)らしい小野の小町を、わたしの代りにつれて行って下さい。

使　そんなことだけで好(よ)いのですか？　よろしい。あなたの云う通りにします。

小町　きっとですね？　まあ、嬉しい。きっとなら

ば、……（使を引き寄せる）

使　ああ、わたしこそ死んでしまいそうです。

三

大勢の神将、あるいは戟を執り、あるいは剣を提げ、小野の小町の屋根を護っている。そこへ黄泉の使、蹌踉と空へ現れる。

神将　誰だ、貴様は？

使　わたしは黄泉の使です。どうかそこを通して下さい。

神将　通すことはならぬ。

使　わたしは小町をつれに来たのです。

神将　小町を渡すことはなおさらならぬ。

使　なおさらならぬ？　あなたがたは一体何ものです？

神将　我々は天(あめ)が下(した)の陰陽師(おんみょうじ)、安倍(あべ)の晴明(せいめい)の加持(かじ)により、小町を守護する三十番神(さんじゅうばんじん)じゃ。

使　三十番神！　あなたがたはあの嘘つきを、――あの男たらしを守護するのですか？

神将　黙れ！　か弱い女をいじめるばかりか、悪名(あくみょう)を着せるとは怪(け)しからぬやつじゃ。

使　何が悪名です？　小町はほんとうに、嘘つきの男たらしではありませんか？

神将　まだ云うな。よしよし、云うならば云って見ろ。その耳を二つとも削《そ》いでしまうぞ。

使　しかし小町は現にわたしを……

神将　（憤然《ふんぜん》と）この戟《ほこ》を食《く》らって往生《おうじょう》しろ！　（使に飛びかかる）

使　助けてくれぇ！　（消え失せる）

四

数十年後（ご）、老いたる女乞食（こじき）二人、枯芒（かれすすき）の原に話している。一人は小野の小町、他の一人は玉造（たまつくり）の小町。

小野の小町　苦しい日ばかり続きますね。

玉造の小町　こんな苦しい思いをするより、死んだ方がましかも知れません。

小野の小町　（独り語（ごと）のように）あの時に死ねば好（よ）かったのです。黄泉（よみ）の使に会った時に、……

玉造の小町　おや、あなたもお会いになったのですか？

小野の小町　（疑（うたがい）深そうに）あなたもと仰有（おっしゃ）るのは？　あなたこそお会いになったのですか？

玉造の小町　（冷やかに）いいえ、わたしは会いません。

小野の小町　わたしの会ったのも唐（から）の使です。

しばらくの間（あいだ）沈黙。黄泉の使、忙（いそが）しそうに通りかかる。

玉造の小町　」

小野の小町　」黄泉の使！　黄泉の使！［＃「黄泉の使！　黄泉の使！」は2行の中央、括弧は2行にわたる波括弧］

黄泉の使　誰です、わたしを呼びとめたのは？

玉造の小町　（小野の小町に）あなたは黄泉の使を

御存知ではありませんか？

小野の小町　（玉造の小町に）あなたも知らないとはおっしゃれますまい。（黄泉の使に）このかたは玉造の小町です。あなたはとうに御存知でしょう。

玉造の小町　このかたは小野の小町です。やっぱりあなたのお馴染（なじみ）でしょう。

使　何、玉造の小町に小野の小町！　あなたがたが、——骨と皮ばかりの女乞食が！

小野の小町　どうせ骨と皮ばかりの女乞食ですよ。

玉造の小町　わたしに抱きついたのを忘れたのですか？

使　まあ、そう腹を立てずに下さい。あんまり変っていたものですから、つい口を辷（すべ）らせたのです。……時にわたしを呼びとめたのは、何か用でもあるのですか？

小野の小町　ありますとも。ありますとも。どうか黄泉へつれて行って下さい。

玉造の小町　わたしも一しょにつれて行って下さい。

使　黄泉へつれて行け？　冗談（じょうだん）を云ってはいけません。またわたしを欺（だま）すのでしょう。

玉造の小町　あら、欺しなどするものですか！

小野の小町　ほんとうにどうかつれて行って下さい。

使　あなたがたを！（首を振りながら）どうもわたしには受け合われません。またひどい目に会うのは嫌(いや)ですから、誰かほかのものにお頼みなさい。

小野の小町　どうかわたしを憐(あわ)れんで下さい。あなたも情(なさけ)は知っているはずです。

玉造の小町　そんなことを云わずに、つれて行って下さい。きっとあなたの妻になりますから。

使　駄目(だめ)です。駄目です。あなたがたにかかり合うと――いや、あなたがたばかりではない、女と云うやつにかかり合うと、どんな目に会うかわかりません。あなたがたは虎(とら)よりも強い。内心如夜叉(にょやしゃ)の譬(たとえ)通りで

す。第一あなたがたの涙の前には、誰でも意気地（いくじ）がなくなってしまう。（小野の小町に）あなたの涙などは凄（すご）いものですよ。

小野の小町　嘘です。嘘です。あなたはわたしの涙などに動かされたことはありません。

使　（耳にもかけずに）第二にあなたがたは肌身（はだみ）さえ任（まか）せば、どんなことでも出来ないことはない。（玉造の小町に）あなたはその手を使ったのです。

玉造の小町　卑（いや）しいことを云うのはおよしなさい。あなたこそ恋を知らないのです。

使　（やはり無頓着（むとんじゃく）に）第三に、――これが一番恐

ろしいのですが、第三に世の中は神代（かみよ）以来、すっかり女に欺（だま）されている。女と云えばか弱いもの、優しいものと思いこんでいる。ひどい目に会わすのはいつも男、会わされるのはいつも女、――そうよりほかに考えない。その癖ほんとうは女のために、始終（しじゅう）男が悩まされている。（小野の小町に）三十番神（さんじゅうばんじん）を御覧なさい。わたしばかり悪ものにしていたでしょう。

小野の小町　神仏（かみほとけ）の悪口（わるぐち）はおよしなさい。

使　いや、わたしには神仏よりも、もっとあなたがたが恐ろしいのです。あなたがたは男の心も体も、自由自在に弄（もてあそ）ぶことが出来る。その上万一手に余れば、

世の中の加勢も借りることが出来る。このくらい強いものはありますまい。またほんとうにあなたがたは日本国中至るところに、あなたがたの餌食になった男の屍骸をまき散らしています。わたしはまず何よりも先へ、あなたがたの爪にかからないように、用心しなければなりません。

小野の小町　（玉造の小町に）まあ、何と云う人聞きの悪い、手前勝手な理窟でしょう。

玉造の小町　（小野の小町に）ほんとうに男のわがままには呆れ返ってしまいます。（黄泉の使に）女こそ男の餌食です。いいえ、あなたが何と云っても、男

の餌食に違いありません。昔も男の餌食でした。今も男の餌食です。将来も男の、……

使　（急に晴れ晴れと）将来は男に有望です。女の太政大臣（だいじょうだいじん）、女の検非違使（けびいし）、女の閻魔王（えんまおう）、女の三十番神、――そういうものが出来るとすれば、男は少し助かるでしょう。第一に女は男狩りのほかにも、仕栄（しば）えのある仕事が出来ますから。第二に女の世の中は今の男の世の中ほど、女に甘いはずはありませんから。

小野の小町　あなたはそんなにわたしたちを憎（にく）いと思っているのですか？

玉造の小町　お憎みなさい。お憎みなさい。思い

切ってお憎みなさい。

使　（憂鬱に）ところが憎み切れないのです。もし憎み切れるとすれば、もっと仕合せになっているでしょう。（突然また凱歌を挙げるように）しかし今は大丈夫です。あなたがたは昔のあなたがたではない。骨と皮ばかりの女乞食です。あなたがたの爪にはかかりません。

玉造の小町　ええ、もうどこへでも行ってしまえ！

小野の小町　まあ、そんなことを云わずに、……これ、この通り拝みますから。

使　いけません。ではさようなら。（枯芒の中に消

える）

小野の小町　どうしましょう？

玉造の小町　どうしましょう？

二人ともそこへ泣き伏してしまう。

（大正十二年二月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
1987（昭和62）年2月24日第1刷発行
1995（平成7）年4月10日第6刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
1999年1月10日公開
2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。